

きもちは、 言葉を さがしている



第30話

水野 スウ

夏休みのあさいチ

8月30日の朝、新聞のテレビ欄で見つけた、NHKあさいチの特集番組「戦争はイヤ！子どもと考える」。北朝鮮からミサイルが飛んできた翌日というタイミングもあり、タイトルにひかれて、チャンネルをまわしました。

登場した子どもたちは小学生から中学生。日本が70数年前に戦争していたことはよく知らないけれど、この先、戦争が起きるかもしれない現実世界の緊張については、どの子も相当、自分ごととして感じている様子です。

だけど、実際には経験したことのない「戦争」って、いったいどういうものなんだろう。そのことを知るために子どもたちは、戦争を経験したことのある二人の外国のひとの元へ、お話を聞きに出かけて行きました。

その一人が、日本に住んで37年になる、イスラエル人の家具職人、ダニー・ネフセタイさん。

18歳から21歳までイスラエル軍に所属していました。埼玉県秩父にあるダニーさんの自宅兼家具工房を訪ねた日本の小中学生たちに、彼は真剣な表情で語りました。

ダニーさんの生まれ育った国では、高校卒業と同時に、男性も女性も全員軍隊にはいること。通っていた小学校の教室には「国のために死ぬのはすばらしい」という言葉が貼り出されていたこと。人を殺すのは良くないけど、戦争はしょうがない、と小さな頃から教わってきたこと。空軍時代、教官から「君がこの戦闘機を使いこなせば、イスラエルの子どもたちが毎晩安心して眠れるんだ」と言われ、みんなのために訓練に励んでいたこと。

そして2008年、イスラエルはパレスチナのガザというところを大々的に攻撃して、空からたくさんの爆弾を落とし、大勢の子どもたちが一度に死んでしまったこと――。

それまで、イスラエルは子どもを殺すような攻

撃をする国ではないと信じていたダニーさんは、空爆に参加した仲の良い友人に、どうしてそんな攻撃をしたんだ、と尋ねます。返ってきたのは、「しかたなかった」。その言葉は、ダニーさんがはじめて、自分の生まれた国がしていることを疑いだす引き金になりました。

しかたなかった、と言わないで

イスラエルで繰り返し言われる言葉「戦争はしょうがない」と「国のために死ぬのは素晴らしい」、この2つが合わさると、疑問もなく人を殺せるようになってしまう。「しょうがないという言葉だけは、使わないでほしい」ダニーさんは目の前の子どもたちに、何度もそう言っていました。

ダニーさんからのお願いと提案は、おとなの私にとっても確約するのがむずかしい、でもとても大事な視点だとあらためて感じました。

そして、パレスチナと何十年にも渡って争い続けている遠い国で育った、私のまったく知らない人が、その現状をしかたないと認めること、努力を諦めることを、拒んでいる。そのことに対して、私はもっと謙虚でいなければ、とテレビを見ながら思いました。

しかたない、という言葉を目にしたとたん、考えはそこでストップしてしまいます。それがこと戦争であれば、あらがうことを諦め、黙ってその状況をうけ入れる自分になってしまう。きっと一人ひとりのそんな、しかたない、が積み重なって、戦争っていうのはつくられているんだ。それなら私は、しかたないって言いたくないし、考えることもやめたくない。しかたないという言葉がこぼれ落ちそうな時、心折れそうな時、一人でためこまないで、誰かとちょっと話してみる。しかたない、以外の言葉を探してみる。そんな時間がきくと、私たちには必要不可欠なんだ。

番組が終わるとすぐ、メモしていたダニーさんの言葉を短く書きまとめてFacebookにアップし、

それをプリントアウトして旅のかばんに入れました。私はその日の新幹線で上京し、滞在中に埼玉県の上尾市で憲法のお話会をすることになっていたの、どうしてもこのダニーさんのお話もおすそ分けしたい、と思ったからでした。

上尾の出前先で

上尾では120人の大きめの講演会と翌日のこじんまり「紅茶の時間in上尾」との2回、憲法を語りました。どの日もダニーさんの言葉をおりこみながら。2日目は、私の書いたダニーさんのお話のまとめを、主催者さんがいてねいに印刷して参加者さんたちに配ってくれました。

するとたまたま私のとなり座っていた女のかたが、うれしそうに言うのです。「私、ダニーさんのおうちに行ってお話を聞いたことがあります！ダニーさんのおつれあいのかほるさんの手料理もいただいてきました。」

あらま！ そういえばこの上尾も、ダニーさんの暮らす秩父も、同じ埼玉県なのでしたね。

お話をうかがってみると、その方、深沼マリさんは、ご自分の元のお住まいを空き家再生というかたちで活かそうと、その場をP-1ラボ（peace first、の意味をこめてP-1、読み方は、ピーチャボ）と名づけ、ギャラリーに、シェアハウスに、集いの場に、と活動しはじめたところだそうです。

出逢えた記念にダニーさんの書かれた本を一冊プレゼントしますね、と深沼さんは、その場でうれしいお申し出をしてくれました。

ダニーさんの本

やがて届いたダニーさんの本。タイトルは『国のために死ぬのはすばらしい？』（高文研）。一気に読みました。イスラエルの歴史、パレスチナのこと、ああ、ほんとに知らないことだらけです。

幼いころからの教育と、とりかこむ社会の価値観の中でごく当たり前、国のために死ぬことは

すばらしい、と刷り込まれてしまう、その過程がダニーさん自身の経験を通してとても具体的に描かれていました。また、悲しく辛い過去をもつ国で生きていくことの、人々の心への過酷な負担も、ダニーさんの本から感じとることができました。

そして何より、ダニーさんが、自分のいま生きている社会で、おかしいと思ったことにおかしいとていねいに声をあげ続ける、ふだんの努力の憲法12条をしていることに、共感もし、感動もし。

ダニーさんに感想をお伝えできたらと思っていたところ、ダニーさんがFacebookをなさっているのを知りました。深沼さんからプレゼントしていただいて本を拝見しました、とメッセージを送ると、とてもリラックスした、感じのいいお返事がすぐに返ってきて。ますます、いつかお逢いできたらいいな、お話もじかに聞いてみたいな、の想いがつのりました。

そこへ深沼さんから、P-1ラボでダニーさんのおはなし会、勇気出してすることに決めました！とのお知らせ。深沼さんいわく、小さな場だから……と迷っていたけれど、スウさんとの出逢いが背中をおしてくれたんですよ、と。

本人が何も意図しないところで、ひとは自ら動き出す。深沼さんがそうやって勇気をだしたのなら、私もえいやっと日帰りで、ダニーさんのお話を上尾まで聞きに行こう！

それを知った深沼さんは飛び上がってよろこんでくれて、せっかくの機会だから、ダニーさんとスウさんのトークセッションもしましょう！あれよあれよのうちにそんな運びになりました。まさに、ひととひとの出逢いが、化学反応を起こすおもしろさです。

ダニーさんのお話@上尾

かくして11月5日、ダニー・ネフセタイさんのお話「国のために死ぬのはすばらしい？」を聴きに、私は再び上尾へ。せっかくのお話なので、

記録と共有の意味をこめて、ここにその日のダニーさんのお話を書きまとめます。

家具職人であるダニーさんは、家具をつくることと、社会活動することを同じくらい大事にしている、と言います。

家具職人としてのダニーさんの夢は、100年生きてきた木で、次の世代も使える家具をつくること。それと同時に、日本に住むイスラエル人としての夢は、次の世代も住める地球をつくること。だから、社会活動をする。自分から発信する、行動する、何気ない会話の中でも社会について語る、この日の上尾のように、どこへでも出かけて行って講演する。ダニーさんにとって、ものづくりと社会活動は、同じ重みを持っていることなのです。

ダニーさんは、日本での永住権は認められていますが、選挙権はありません。日本では二重国籍が認められていないからです。日本での選挙権を手にするためにだけにイスラエルの国籍を失わなければならないことは、イスラエル人としてやっぱり悲しい。ならば、投票で社会を変えられないかわりに、それを上回るくらい、イスラエル人である自分にしかできないことを、と8年前から講演活動をはじめたのだそうです。

テーマは、平和と戦争に関すること、18歳になったら男女問わず軍隊にはいる母国のこと、日本がどんどんイスラエルに似てきていること、3.11後は、「原発危機と平和」と題して、脱原発／脱無関心をうながす話をするのもあれば、「外国人の目に映る人権」と題して話すことも。

ダニーさんが小学生だったころ、教室の黒板や修学旅行先で見える銅像に刻まれていた言葉が、「国のために死ぬのはすばらしい」でした。そこにはもちろん「？」はついていません。

学校の校庭には古い戦闘機が置いてありました。4年前に里帰りしたら妹さんの子どもが通う小学

校には古い大砲がおいてありました。校庭には、この学校を卒業して戦死した人たちの名前を刻むための石碑もありました。

高校を卒業したダニーさんは、多くの人がそうするようにごくごく当たり前に軍に入り、3年の兵役につきました。19歳で戦闘機のパイロットを目指したダニーさんは、教官に言われるままに、自分がこの機を使いこなせるようになればイスラエルの子どもたちが毎晩、安心して眠れるんだと信じていました。それは同時に、パレスチナの子たちに眠れない夜を過ごさせることだ、ということは想像もできなかつたと言います。イスラエルは平和を愛する国だが、相手は違うんだ。悪いのはあっちなんだ。ずっとそう言われて、それを信じていたんだ、と。

空軍を退役した後、アジアを旅してまわり、寄り道のつもりでやってきた日本で、中世のユダヤ人の歴史を学んでいるかほるさんと奇跡の出逢いをし、結婚をして、父親になったダニーさん。

でも彼は、妻のかほるさんから、イスラエルのしていることはおかしいよ、と言われても、なかなか聞く耳を持つことができなかつたと言います。そんな中起こった、2008年の大規模なガザ攻撃。日本で暮らし始めて25年あまりたった頃のことでした。

たくさんパレスチナの子どもが死んでしまったニュースを、ダニーさんは信じられない思いで見つめていました。同期で軍にいる友人たちに攻撃の理由をきくと、誰もが「しかたなかつたんだ」「他に方法がなかつた」と言います。友人たちはみんなすばらしい人たちです。悪魔はいません。だけでも、素晴らしい人でも人を殺せるようになってしまう。それが戦争なのです。

民間人も殺しながら、悪者は相手の方、イスラエルは子どもを殺す国ではない、と言い続ける自分の生まれた国、イスラエル。その時から、ダニーさんは徹底的に国を疑うことを始めたのだと言います。いっぱい勉強した、いっぱい調べた。自分

の信じていた国を疑うのも否定するのも、とてもつらくて苦しいこと。けれどもそれを超えて、ダニーさんは自分が知れたことと平和への願いを、日本語とヘブライ語で自身のブログに書き始めました。

ダニーさんのファミリー・ツリー

ダニーさんの父方のおじいちゃんが生まれたのは、オシフィエンチムというポーランドのかわいい田舎町。1920年におじいちゃんはその村を出て、イスラエルに移住しました。

後にその小さな町はドイツに占領され、アウシュビッツと呼び名を変えられることとなります。5年の間にこの収容所だけで150万人が殺され、イスラエルに移住しなかつたダニーさんのおじいちゃんの親戚の多くも、この地で命を落としました。

一日に8,000人が殺されたこの町では、女性もホロコーストにかかわっていました。ダニーさんが見せてくれた1枚の画像には、楽しそうに笑うナチスの職員の女性たちが写っています。一方でたくさんの人を殺しながら、その一方で、罪の意識を感じることなく、笑いながら楽しく日常を送っている人々……これは一体どういうことなのだろう。

終わらないイタチごっこ

ところで、現在の中国の国防費を知っていますか？正解は16兆円。日本は、5兆円。今のままでは、どうやっても武力で中国に対抗することはできません。税金を増やして国防費を16兆円にする？その時になったら相手の国防費はきつともっと増えているでしょう。国防費ってそういうもの。終わらないイタチごっこなのです。

お金で足りないなら、国のために死ぬ教育をしないと、勝てない。そこに日本は戻ろうとしているのだとダニーさんは言います。日本を取り戻す、って、まさにその方向に向かっているという

こと。すでに、アメリカの最新戦闘機の部品の4割は日本製です。

ヘルマン・ゲーリングの有名な言葉があります。

「普通の間人は戦争を望まない。しかし、国民を戦争に参加させるのは簡単なことだ。国民には攻撃されつつあると言い、平和主義者のことは愛国心に欠けていると言い続ける以外には何もする必要がない」

世論調査によれば、日本人の75%が北朝鮮を攻撃してもいい、と思っているそうです。メディアのあおりで、北朝鮮と聞けばあの人の顔しか思い浮かばなくなっているかもしれません。だけど、北朝鮮を攻撃するという事は、そこで普通に暮らしている人々を攻撃すること。そのことになかなか思いが至らない。ダニーさんが問いかけます。攻撃していいと思う人たちに言いたいんだ。それはヒロシマやナガサキを容認するということだよ、と。

フランスの寓話、「茶色の朝」でも描かれているように、人々はたとえ間違っていることでも、一度流れができてしまえば、いかに簡単に同じ方向にいつてしまうか、ということなのです。

9.9%の人に

日本の有名人の多くは、大きな影響力を持っているはずなのになぜなかなか声をあげないのか。それは、ホロコーストの職員と同じだとダニーさんは言います。「立場上、個人的な意見は言えない」「国策だから」と言う彼ら。自分の立場のことは考えても、自分がしたこと、あるいは何もしなかったことによって、他者にどんな影響を与えているのか、考えることができなくなってしまっているのです。

この言い訳が存在する限り、差別と戦争は無くならない。このことを理解するのに必要なのは、想像力とハートだとダニーさんは言います。私たちの自由がなくなる瞬間とは、共謀罪で一人目の

逮捕者が出た時ではありません。一人目が発言する前に、こう言うことを言っているのだろうかと思ひ始めた瞬間がその時なのです。

3.11後、ダニーさんは仲間たちと「原発とめよう秩父人」を立ち上げました。今も2週に一度集まり、脱原発にかぎらず、さまざまな社会問題について話しあい、行動しています。だけど、3.11から6年が経ち、原発はなくなるどころか次々と再稼働を始めているという現実。これまでしてきた活動によって原発が止まらないのなら、これからは、今までやってこなかったことをするしかない。自分たちが逃げてきてしまったのはいったいなんなのだろう——？

ここで、この日のキーワードになりそうな数字が、ダニーさんの口から出てきました。今の日本では、おそらく90%の人が政治や社会のことに無関心だろう。関心をもって行動しているのは0.1%。残りの9.9%が、関心はあるけど行動までは、という人たち。

これまで活動してきた0.1%の人たちは、無関心な90%の人をなんとか変えよう、動かそう、と頑張ってきたかもしれません。だけど、今必要とされているのは、関心はあるけれども次の一歩を踏み出せないで戸惑っている9.9%の人たちの背中をそっと押してあげられるような、そんな働きかけなんじゃないだろうか。そのために、自分たちに何ができるだろう。

ダニーさんは今、仲間たちと、これまでしてきた活動をいったん見直して、まだ一度もやったことのないことを試してみようと、プロジェクトチームを作って新しいアイデアをだしあっているところなのだそうです。

ダニーさんのお話を聴いて

ダニーさんの本を前もって読んでいたにもかかわらず、目の前でライブで聞くのは、やはりすごい迫力です。

何より、「国のために死ぬのはすばらしい」、イスラエルで今も生きているこのキャッチフレーズが、ほんの70数年前の日本に、おそろしいほど重くなりました。そのすばらしさの証として、戦死した人たちは靖国に行けたのですよね。逆にいうと、「すばらしいこと」にしておかないと、国のために死んでくれる国民がいなくなってしまう、ということかもしれない。現に今、教育がそっちの方向にむかっていることとあわせて、その暗い予兆を痛烈に感じるお話でした。

戦前そんなふうにいのちが、個人が、ないがしろにされたことの大転換として、憲法13条には「個人の尊重／個人の尊厳」がうたわれているのです。私のいのちはかつてそうだったような、国のもの、国を存続させるためのとりかえのきくパーツではありません、そうはっきりと言える根拠が13条にある、と私は確信しています。

けれどもその一方で、それを打ち消そうとする力がこの数年間におそろしく成長してきていることも、ひしひし感じるのです。

ネットの中では毎日、決して少なくない数の人たちが死にたいとつぶやいている。それって、その人が他者から、この社会から、粗末にされ、無視され、自分には何の価値もない、生きている資格がないんだと思わされていることの裏返しのようにも思えます。

今ほどのひどい格差社会になってしまった原因を、すべて政治のせいになれば楽だけれど、そういうわけにもいきません。今の社会をかたちづくっているひとかけらとしてのわたし／あなた、その集合体が今の現実社会なのだから、責任のひとかけらはもちろんこの私にもあるわけで。

死にたいという願いをかかえて生きている、とりわけ若い人から見えている大人のわたしたちは、はたして自分を生きているか？ 人と人とのつながりの間で、人間として生きているか？ そして何より、自分とつながる目の前の人を、個の人として大切にしているか？ そう問われている気が

してなりません。

ダニーさんの人権センサー

ダニーさんの持っている人権感覚のセンサー（自分には都合よくて、まったく痛くなくても、その一方で泣いている、痛みを感じている人たちがいることに気づく）にくらべて、私たちの人権意識センサーはどれも鈍すぎるようです。

そもそも、人権、という漢字二文字が、何か自分の日常から遠く離れたところで浮遊してるように思えてしまっている。自分が踏みにじられる側になってはじめて人権が自分ごとになる場合もあれば、そうされていてもなお、踏みつけられているのが自分の人権だと気づかない人もいるでしょう。

人は、まわりからいつもあまりに大切にされないでい続けると、それが当たり前みたいに感じてしまう。上の立場（たとえば雇用主や管理者や権力の側にいる人たち）からすれば、むしろそのまま気づかないでいてくれた方が、まちがいなく好都合なのでしょう。

伝える時に必要なもの、13条のきもち

どんなに大事なこと、知ってほしい話であっても、聴いている人に届かなければ意味がない、と言いきるダニーさん。実際、彼の話は、内容は重く深刻なはずなのに、ユーモアがあり、個人攻撃をせず、事実をうらづける具体的な数字を見せながら論理的に話してくれるので、抵抗感なくお話がスツとはいつてきます。

映像で見せる部分にも、伝えるためのさまざま工夫。福島原発の汚染水を隠すのに、オリンピックの五色の5つの輪っかが、空から飛んできて原発にふたをしたり。イスラエルのネタニヤフさん、安倍さん、トランプさん、3人が3人ともこっちを指差している図は、まるで三つ子の写真のようだったり、と。

それは、彼の意識センサーや人権センサーに赤ランプがつくたび、これをどうやって人に伝えよう、と真剣に考え、画像や添えるコメントを毎回工夫してよりよく伝えようとする、彼の努力のままものだったことが、今回お話をきいてよくわかりました。

8年前に彼が講演活動をスタートさせた時、最初の1年間はおつれあいのかほるさんがすべての講演会に同行し、彼の話をチェックするための厳しい耳をもって参加したそうです。この言葉はきつすぎる、これではうまく伝わらない、この言い方だと日本人にはかなり抵抗感がある、などなど「ぼくの90分の講演に対して、かほるからのチェックは2時間もかかったんだよ！」とダニーさん、笑っていました。

なんとか相手に伝えたい、と願いながら誠実に努力する時、相手を大切に思い尊重するきもちが、自然に伴ってくるものなのだろうな、とダニーさんのお話のはしばしで感じました。それはわたしの言わんと、ダニーさんが13条の精神を実践しているということだと思います。

私も、憲法のおはなしの出前先でいつも、自分が大切な存在であるのと同じように、あなたも、そしてほかの人も、とりかえのきかない大切な存在だよ、と言ひ、それが個人の尊厳の13条としっかりリンクしていることとお話するのだけれど、その時、私自身がそこにいる人たちを尊重するきもちでもって語らなければ、その13条は伝わりっこない、と感じています。

それだけに、この日はじめて逢ったダニーさんが、まるで13条を介してつながった得がたい同志!のごとく見えました。おかげで単にお話を聴けた、という以上の豊かさに満ちたきもちをおみやげに最終便の新幹線に飛び乗り、石川にとんぼ返りをしたのでした。

そして、アメリカ大統領

ダニーさんのお話を聴いた翌日、目にしたのは来日したトランプ大統領が、アメリカの迎撃機を買うよう安倍さんに迫ったというニュース。日本にミサイルが飛んできたら、日本はそれを使って撃ち落とすことができるし、アメリカはそれで雇用がふえて儲かる。それは両国にとっていいことだ、そうだろう?と。そして安倍さんはその商談を了承したというのです。

まさにダニーさんが、今の日本はイスラエルにすごく似てきている、と言っていたことを証明するような現実。イスラエルが毎年、アメリカから兵器を購入する大得意先であるように、日本もこの先イスラエルを見習って、終わらないイタチごっこにさらにはまるのでしょうか。100年の家具づくりと社会活動、ダニーさんのしごとはまだまだずっと続いていく……。

2017.11.24

